

117期通信

北海道小樽潮陵高等学校 1 学年通信
令和2年 10月 12日 (月) 発行 第15号
潮陵 1 学年団

☆特別号 NO3

今回は、鈴木先生（保健体育担当）に「高校時代」について書いて頂きました。

ここは天国どころか極楽じゃないか、勉強以外は……。潮陵に入学をして、そんなことを感じていた。中学校の時は、チョコチョコするたびに正座をさせられ、往復ビンタを先生からいただいた。しかし、潮陵の先生は殴らない。これが本当にびっくりした。同級生も平和的で穏やか。こんないい学校あるんだと思った。

潮陵高校に入ったときに楽しみにしていたのが部活だった。中学校3年生の時に出場した大会は中体連のみ。中学校が荒れていて、ほとんど大会に出場できなく、なんとか中体連だけは出場したという感じだった。そんな不完全燃焼のままだったので、高校ではとにかく部活をやりたかった。

極楽湯に浸かっていて心地良かったのは間違いないが、時間が進み自分の将来と向き合ったときに、「このままではまずい」という今度は真っ暗い気持ちが襲ってきた。

「勉強を全然していない」「行ける大学なんてないんじゃないか」「そもそも、何をやりたいか自分でもわからない」

学校生活は楽しいので気分は紛れるが、やはり将来のことを考えると辛くなる。それが確か2年生最後ぐらいだった。

「これが潮陵高校のやり方なんだな。墮とすところまで墮として、自分で気づかせる作戦か」と恨みにも似た気持ちになったが、冷静に考えると自分が遊びすぎて勝手に落ちて行っただけである。この時の将来に対する不安は、正座往復ビンタより辛かったことを覚えている。

そんな時に、B棟のトレーニング室に繋がる廊下前で何気なく成績表を眺めていた。総合順位が学年で7番だった。「俺も結構いけるな」なんて気分をよくしながら閃いた。得意なこと、好きなことで人生を切り開こうと。

勉強では難しいことだらけでよく分からず、失敗も沢山したが、サッカー部やクラスの仲間と沢山遊び、勉強を教えてもらい、そんな環境で過ごすことができたのは幸せだった。周りには圧倒的な能力を持つ者もあり羨むことあったが、自分は地道に亀的に生きなければ通用しないと強く自覚させられたのも潮陵高校だった。



遠足
PHOTO

